



2019

付中通信第6号

文科省の志

2019.8.30

高水高等学校附属中学校長 宮本 剛

今の高校二年生から新入試制度の下で大学受験への取り組みが始まります。この度の入試改革は明治以降で最大の改革とも言われています。まずセンター試験は、大学入学共通テストという名称に変わります。共通テストは、「知識・技能」だけでなく、大学入学段階で求められる「思考力・判断力・表現力」を一層重視するという考えがベースにあり、記述式問題の導入もその一環といえます。また、マークシート式問題についても、作問や出題形式を含めて見直しが進められています。

この入試改革が押し進められる中、今最も批判が集中しているかに見えるのは、英語民間試験の活用についてです。受験生を送り出す高校側からも、受け入れる大学側からも、聞こえてくるのは、実施について時期尚早の大合唱です。

そのポイントを簡単にまとめると、

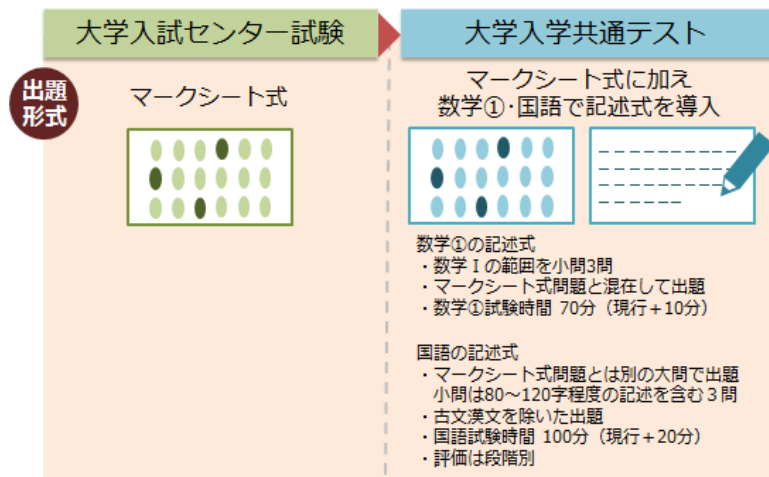
- (1)希望する時期や場所で試験を受けられる見通しが立っていない
- (2)地域・経済格差への対応が不十分
- (3)試験の詳細が明確でなく、指導計画が立てられない
- (4)公平、公正に対する不信が解消されていない



これらはそれぞれもっと具体的に説明しなければ、どのくらい深刻なことなのか理解できませんが、紙面の制約上、これ以上触れません。しかし、最近のマスコミの報道からも新入試に対する文科省の姿勢は、常識的に見てかなり無理があるというのは十分認識できると思います。

しかし、私はそもそもなぜ英語民間試験を公的な大学入試の一環として採用しなければならないかという、本質的な問題を忘れてはならないと考えています。実は私も、また私の知りえる賢明な教師たちは、どちらかという今回ばかりは文科省を応援する立場を鮮明にしています。

今のままでは日本は世界の流れについて行けない。第4次産業革命や政府の社会変革目標「Society 5.0」を牽引する人材と人物を今の学校教育では育てていくことができない。これは各種データが裏付ける現実です。

文科省はそうなってしまった理由と、今の子どもたちがこれからの社会の中でやり甲斐と生き甲斐を



大学入試センター試験	大学入学共通テスト
<p>英語</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 筆記 (200点) 発音、アクセント、語句整序など単独で問う問題を出題 ● リスニング (50点) 読み上げられる音声の回数は、全て2回読み 	<ul style="list-style-type: none"> ● リーディング (100点)  発音、アクセント、語句整序などを単独で問う問題の出題はない ● リスニング (100点)  読み上げられる音声の回数は、問題により1回読み、2回読みのものが混在

もって生きて行ける方法を知っています。学校教育を変革する時期はとうに熟し切っており、決断決行を後回しにできないことは明白なのです。

志望通りの大学に合格したい、させたいという生徒と保護者の願いを叶える使命を高校は果たさなければなりません。だから志望大学の入試問題を徹底的に研究し、生徒と一緒に解きながらできるす

べてのアドバイスをします。その入試問題がどうであろうが、傾向と対策に全力で当たることがわれわれ教師の生き様であり、そうでないととても受験を突破することなどできはしません。

つまり、いくら理想的な学習指導要領を編んだところで、入試問題が理想的でなければ、結局のところ、授業を改革することは無理だということです。きれいごとは通用しません。それを現場は嫌というほどわかっています。

だから入試を変えなければ、子どもたちの未来は変わりません。なぜ6年間、いや大学も含めると10年間も英語を勉強してあれほど話せないのか、使えないのか、外国人から見るとこれほど摩訶不思議な現象はないでしょう。4技能がバランスよく身につく英語の授業を行ってください。と言っても入試に出なければ、生徒も先生もやらないのです。

その4技能を試すことが英語民間試験でしか今のところ対応できないのであるならば、それに頼るしかないのです。

目の前の不都合を並び立てて文科省を批判するのではなく、今は少しでも理想の入試に近づけるための議論を前向きに行うべき時です。

現場の私たち教師が文科省の足を引っ張るようなことがあってはならない、むしろその志を遂げさせるためにどうすればよいかを考えるべきです。